
ina Commedia Doc Ju Mente 奏でよ、神曲を。謳え、汝の心を

月天輝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G i o c a t o L a D i v i n a C o m m e d i a D o
c J u M e n t e 奏でよ、神曲を。謳え、汝の心を

【Nコード】

N 9 1 3 0 N

【作者名】

月天輝夜

【あらすじ】

貴方は私を救って下さいました。

何もかも失って。

何もかも壊れて。

何も出来なくなった私。

そんな私を貴方は見つけてくれた。助けてくれた。そして、見捨て

ないでいてくれた。

それがどれほど嬉しかったことでしょう。

それでどれほど救われたことでしょう。

貴方の心の響きは、それは何物にも変えられないほど美しく、私は貴方と一生を共にしたいと思ったのです。

私の心は貴方の心に。

私の命は貴方の心に。

私の全てを貴方に捧げましょう。

それが私の喜びであり、誇りであるのです。

そう言えば、彼の学園にはこんな言葉が掲げられていましたね。

奏でよ、其は我等が盟約也。

其は盟約。

其は悦楽。

其は威力。

故に奏でよ、汝が魂の形を。

うふふ、この言葉は貴方にぴったりですね。

ACTO. PROLOGUE

貴方は私を救って下さいました。

何もかも失って。

何もかも壊れて。

何も出来なくなった私。

そんな私を貴方は見つけてくれた。助けてくれた。そして、見捨てないでいてくれた。

それがどれほど嬉しかったことでしょう。
それでどれほど救われたことでしょう。

貴方の心の響きは、それは何物にも変えられないほど美しく、私は
貴方と一生を共にしたいと思ったのです。

私の心は貴方の心に。
私の命は貴方の心に。

私の全てを貴方に捧げましょう。

それが私の喜びであり、誇りであるのです。

そう言えば、彼の学園にはこんな言葉が掲げられていましたね。

奏でよ、其は我等が盟約也。

其は盟約。

其は悦楽。

其は威力。

故に奏でよ、汝が魂の形を。

うふふ、この言葉は貴方にぴったりですね。

ACT 1. PAST

赤。見渡す限り、景色は全てが赤に染まっている。炎の赤色。血の赤色。地獄というのは此処のことを言うのではないだろうか。

生は存在し得ぬ、死と滅の方が近い空間。

ここはほんの数時間前まではいたって普通の町だった。ラジオで聞くことはあっても、ニュースで見るとはあっても、テロとは無縁の町だった。平穏な時間が流れ、友と遊び、家族と夕食の席で笑いあう。そんな平和な町だった。

だがそれは、たった一日で崩れ去る。

《嘆きの異邦人》

それがこの惨劇を引き起こした集団である。

各地で巻き起こるテロ事件。それが遂にこの町にまで来ただけ。だがそれだけのことが、決して小さくはないこの町を全滅させた。《嘆きの異邦人》たちは、この町においてかつてない戦力を投入。その結果、一つの町を消滅させてしまうような甚大な被害を引き起こしたのである。

何故彼らはこの町をこれほどまでに完膚無きまでに叩きのめしたかったのか。大した重要人物もいない、大した重要な兵器も無いはずのこの町を。

それは、遅れて到着した鎮圧隊にも分からなかった。

そんな中、ある一人の女性が這々の体で森の中をさ迷っていた。

女性の着る服は美しく、その色はまさに紺碧と言うのが相応しい。袖や丈は長く儀式の時に纏うような衣装だが、肩や胸元に大きな切れ込みが入っていて、彼女の美しい白い肌や黒い服に覆われた胸元を晒している。そして、そんな彼女の美しい肢体と同じくらい目を引くのは彼女の髪であった。腰まで伸びた、服と同じ紺碧の髪の毛は静かに波打ち、それは人が足を踏み入れたことがないような美しい紺碧の海のようなだ。

その色は決して人には出せないものだろう。その証拠に彼女の背中には光り輝く六枚の羽が備わっていた。

彼女は精霊。しかも上級精霊だ。

しかし彼女の綺麗な紺碧の瞳は疲労で霞み、その精緻な文様を描いている青の羽は点滅し、今にも消えそうになっている。

美しく白い肌は傷だらけで、それでも彼女は足を引きずるようにして歩き続けた。

「くっ……まさか彼女が出てくるとは……」

彼女は美しい顔を歪め悪態をつくと後ろを振り向く。

「……何とか撒いたようですね。それとも彼女が何とかしてくれたか……いずれにせよ、少し傷つきすぎたようですね……」

彼女は歩くスピードを緩めようとしたが、ふらつき膝をついてしま

った。

「はぁ…はぁ…やはり、限界でしたか……。彼女に対抗したのだから仕方ありませんが……。ふふ、不滅と呼ばれた頃が懐かしいですね」

彼女はそう呟くと傍にあった岩に寄りかかるように座り静かに目を閉じた。

まるで、消えてしまうのを受け入れたかのように。

だが彼女はすぐに目を開いた。そして驚いたような顔で辺りを見渡した。しかし周りには木々しかなく、葉の擦れあう音しか聞こえず、ただ風が吹いているだけ。しかし彼女は精霊の聴力で確かにあるものを聞き取っていた。

「（これは……！？ いや、でもこれは……）」

彼女は音の聞こえた方——すなわち風上の方を見ると、再び立ち上がった。

「どうせ消滅するならば……せめてこの神曲の近くで……」

彼女はそう呟くと、ゆっくりと歩き始めた。

しばらく歩き、彼女が目にしたものは。

「こ、これは……」

静かに暗きを湛える森の中らばかりと空いた広場に出ると、そこは一変し、まばゆい光で照らされていた。

無数の光が明滅している。それが数多の精霊たちの羽根であることを彼女が理解出来たのは、少し経ってからだった。

最も多いのはボウライのような下級精霊だが、人型や獣型の中級精霊もいる。さらには彼女と同じ上級精霊もいた。

彼らは皆一点を見つめ、ある音楽に聞き入っている。

すなわち、神曲。

精霊と会話する為の音楽であり、神曲楽士の魂を示すものでもある。

しかし、彼女は我が目を、そして耳を疑った。

今、この空間に響き渡っている神曲が歌だったからである。

普通ならば不可能。単身楽団がなければ神曲は演奏出来ない筈なのだ。しかし目の前に広がる光景はまさしく現実。歌ではなりえない筈の神曲を聞きに、こんなにも多くの精霊たちが集まってきているのだから。

彼女は眼前の奇跡に誘われるかのようにふらふらと前に進もうとしたが、体の方が限界だったのかバタリと音をたてて倒れてしまった。

その音に気付いたのか神曲は止まる。

「（ふふ、こんな素晴らしい神曲が最後に聞けるとは……嬉しいものです）」

女性が神曲を聞いたことを嬉しく思っていると、その神曲楽士が彼女に近付いてきた。

「大丈夫……じゃないか」

その神曲楽士は彼女の様子を見ると、彼女が深刻な状態なのを理解した。

「ヴィーラ！！ 出来るだけ早く単身楽団を取ってきてくれ！ ヴイオラの方だ！」

彼は誰かにそう頼むと、自身は周りにいた多くの精霊たちに向かって言った。

「悪いが今日はおしまい。またやるからよろしくな」

彼がそう言うと、精霊たちは散り散りにこの場を去っていった。残ったのは彼と彼女の二人だけ。

「ヴィーラが来るまでの辛抱な。それまでは歌うから我慢してくれ」

そう言うと彼は再び歌い始めた。さっきまでの歌と似ていたが、今度のは彼女の為に歌ってくれているのが分かった。

「（ああ……なんと美しい……）」

彼女は彼の歌に感動しつつ、気を失ってしまったのだった。

これが、神曲樂士ーカグヤ・ブライトと、かつて『不滅の女帝』
と呼ばれる紺碧の女神ーアルトヴァース・ミラ・ストレアマーテ
イトの、最初の出会いだった。

ACT 2. HUNGRY

空は蒼く晴々と。鳥たちはさえざり、暖かな日差しが降り注ぐ。

ここは将都トルバス。人口は200万人で、帝都メイナードを取り囲む衛星都市である。経済と交通の要所で治安も良く、ケセラテ自然公園のような自然も多い。

そして第三公社・第六公社、そしてトルバス神曲学院を有し、「神曲の都」とも呼ばれている。そんなトルバスの街中にある人物がいた。

「はい……、はい。それでは今から帰ります」

彼——タタラ・フォロンは電話を切ると、後ろを振り返った。そして、大きな《ハーメルン》の上に座っている赤い髪の少女の元に向かった。

「お、終わったかフォロン」

彼女はコーティカルテ・アパ・ラグランジェス。フォロンと精霊契約を結んでいる上級精霊である。彼女の凜とした姿は少女の形をしているものの、とても優美である。

「うん。それじゃあ帰ろうか」

フォロンはヘルメットをかぶって《ハーメルン》にまたがる。ついでコーティカルテも後ろに乗った。彼らは依頼された、老朽化した建物の解体作業の帰りである。

終了の報告を終えたフォロンが事務所に向かっていて、何の前触れもなくコーティカルテがフォロンの背中を叩いた。

「む？ フォロン、ちょっと止まれ」

「え？ どうしたの？」

「いいから。早く止まれ」

相変わらずなコーティカルテの物言いに、首を傾げながらも彼女の言うとおりにする。

コーティカルテはバイクから降りると、キョロキョロしながら路地の奥に入って行ってしまった。

「ちょっと、コーティ待ってよ」

フォロンは慌てて彼女のあとを追った。フォロンが追い付いてもまだコーティカルテはキョロキョロしていた。

「どうしたのいきなり？」

フォロンが尋ねると、コーティカルテは首を傾げた。

「いや……覚えのある気配がしたんだが……。もう少し奥に行ってみるか……」

「ちょっとコーティ！？ ああ、もう！！」

フォロンの制止にも構わず、コーティカルテは奥の方へ行ってしまった。ほっておくわけにもいかないので、フォロンもコーティカルテを追いかけた。すると彼女は案外近い所で立ち止まっていた。

「もう、どうしたの……って、うわっ!？」

コーティカルテにはかり気がいつていたフォロンは、コーティカルテの足元に人が倒れているのに気付くのが遅れた。

見たところ息はしているので気絶しているだけのようだ。しかし治安の良いトルバスにおいて、人がぶっ倒れていることなんてそうそうあるものではない。

しばらく呆然としていたフォロンだったが、気を取り戻すと、急いでこの人物の安否を調べた。見たところ怪我はないようだ。顔色もそこまで悪くないし、うめき声をあげているわけではないので、持病の発作というわけでもないだろう。

フォロンはひとまずこの人物を事務所に連れて行こうとしたのだが、あいにく彼はハーメルンに乗ってきている。気絶している人間を後ろに乗せて走る、というのは——しかも交通量が多い中で——フォロンには無理だった。

フォロンは少し考えたあとコーティカルテに何か言おうとすると、その前にコーティカルの方から口を開いた。

「分かっている。ハーメルンは私が持つて行くから、フォロンはその男を連れていけ」

普段、コーティカルテがこのように厄介事はあまり好きではない。

契約者であるフォロンが優しいため、しぶしぶながらも手伝うことはあっても、自分から手を出そうとはしない。

しかし、今回は自分からハーメルンを運ぶと言ったのである。

フォロンが驚いているのに気付いたコーティカルテは少し不機嫌そうな顔をした。

「何だその顔は。……まあ私らしくないのは分かっているが、こいつに聞きたい事があるのでな」

コーティカルテは何かを考えるように男を見ていたが、顔をあげてフォロンをキッと睨んだ。

「ほら、フォロン。早く運べ」

「わ、分かったよ」

フォロンは男を背負うと、コーティカルテと一緒に路地から出た。

「じゃあコーティ、よろしくね」

「うむ。任せろ」

ハーメルンをコーティカルテに任せると、フォロンは事務所へと急いだ。

ツゲ神曲楽士派遣事務所。十年に一度の逸材と称された天才ツゲ・

ユフィンリーが経営する事務所で、彼女を始め、若手が多いが腕の立つ者ばかり。更には個々人が粒ぞろいで、色々な意味でも有名である。プロ意識も高く、仕事中は気を抜くことはないのだが――今回ばかり流石のユフィンリーも呆れていた。

「で、あんたはこの人を連れてきた、と」

フォロンから事の次第を聞いたユフィンリーは確認するように尋ねた。

「はい……」

フォロンは申し訳なさそうに頷く。ちなみにコーティカルテも帰ってきている。

ユフィンリーは再びため息をつく、自分の席に座った。

「ま、今更気絶した人をほっぽり出すわけにもいけないし、今回は許すけど、今度からはせめて連絡しなさい。いいわね？」

「はい。すみませんでした」

「ん、よし。……にしても、ずいぶんイケメンねえ。レンバルト以上じゃない？」

ユフィンリーはソファで眠る男を見て、自分の席に座っているレンバルトに話を振った。

彼はフォロンと同級生で、ユフィンリーの後輩で、天才と呼ばれた人物である。容姿も端正で学生時代は女子に追いまわされており、

現在もそれは進行中である。

で、話を振られた当の本人は苦笑いをしていた。

「返答しにくいんですけど、その質問」

「冗談よ冗談。しかしコーティカルテが興味を示すなんて珍しいね。どんな風の吹きまわし？」

コーティカルテは、男が寝っ転がっているソファの向かいに座っていた。

「気にするな」

男を見ながら短く返事をするコーティカルテを見てユフィンリーとレンバルトは顔を見合わせた。

「所長、タオルの水取り換えてきました」

奥から来たのは二人の少女。金髪の方をユギリ・ペルセルテ、銀髪の方はユギリ・プリネシカ。双子の姉妹である。2人とも学生時代からバイトとしてこの事務所に勤めており、学院を卒業して晴れてこのツゲ神曲楽士派遣事務所に就職したのである。

プリネシカは男の額に乘せてあるタオルを交換すると、コーティカルテの横に座った。ペルセルテも奥から持ってきたのか、お菓子の入った皿をテーブルの上に置くと、プリネシカの横に座った。

「ま、依頼された仕事もないし、他のもひと段落したことだし、少し休憩しましょうか。ペルセルテがお菓子持ってきてくれたし」

ユフィンリーはそう言うと、空いている席に座った。

「じゃあ、お茶を淹れてきますね」

プリネシカがお茶を淹れに奥へと戻る。ユフィンリーはお菓子を一つ取って食べようとすると、男の体がピクリと動いた。

「……食べ物？」

いきなり男が目を開けたので、全員——コーティカルテを含めて——ビクッと驚いた。

「あ……、って呆けてる場合じゃない!! 大丈夫ですか!!」

真っ先に正気を取り戻したユフィンリーは、男に声をかけた。だが男はユフィンリーの言葉には反応せず、フラフラと視線を巡らすと、ユフィンリーが持っているお菓子に焦点を定めた。

「お……お……」

「だ……大丈夫ですか？」

断片的にしか言葉を発しない男に、ペルセルテも心配になって声をかけたのだが、やはり男は反応しない。

「お……おな……」

「え? 今なんて」

ユフィンリーが男の口元に耳を寄せると、男は小さく呟いた。

「お……おなが……すいた」

「はい？」

ユフィンリーが思わず気の抜けたような声をあげると、同時に男の腹から盛大な音が鳴り響いた。

「いやー、助かりましたよ。水以外のものを口にするのは久しぶりです」

男は口直しにお茶を飲みながら言った。ちなみに皿の上のおかしは既に空っぽである。

「で、一応自己紹介をしておきますね。私はカグヤ・ブライト。神曲楽士やりながら旅をしていました」

「旅？」

向かいに座るユフィンリーは訝しげな顔をした。

「はい。10年ちょっと旅しています。あ、免許は持ってますよ。モグリじゃありません」

「では、ここにも旅の途中で？」

「はい。でもここで最後にしようと思っています。ですから就職先を探していたのですが……先に路銀が尽きてしまって……今食べたのが4日振りの食べ物です」

ブライトは妙に遠い目をしたので、ユフィンリーは苦笑した。

「それで、やはり就職先となると……」

「はい。神曲楽士派遣事務所ですね。まさか神曲楽士に助けられるとは思いませんでしたが。ありがとうございます」

ブライトはフォロンに頭を下げた。

「あ、いや。そんなことは」

「いえ。言わばあなたは命の恩人。出来ることならなんなりと」

「ですからそんなこと……」

「ならば私の質問に答えてもらおう」

今まで黙っていたコーティカルテが突然割り込んできた。

「ちょっとコーティ!？」

「こいつを初めて見つけたのは私だ。ならば私も命の恩人だろう」

「いや、でもね……」

「ふむ、確かにそうですね」

「カグヤさん……」

呑気なブライトにフォロンは思わずため息をついてしまった。

「ならば聞く。お前は、アルトヴァース・ミラ・ストレアマーテイという精霊を知っているな？」

コーティカルテの質問は実に簡単なものだった。しかし彼女が口にした『アルトヴァース』という名前は、他の皆にとっては初耳だった。

「そういう君はコーティカルテ・アパ・ラグランジェスさんかな？
『紅の女王』の」

この言葉に皆びっくりした。なぜならコーティカルテが『紅の女王』だということを知っているのは、一部の者たちしかないからだ。

だが、コーティカルテ自身は予想していたのか、さして驚いた様子はないかった。

「ではやはり……」

「ええ。アルトヴァース・ミラ・ストレアマーティは私の契約精霊です。あなたのことはよく聞いていますよ、コーティカルテさん」

ブライトはコーティカルテの睨みにも怯まず、しっかりと答えた。しばらく2人は何も喋らなかったが、それを破ったのは意外にもコーティカルテの方だった。

「頼む。アルトヴァースを呼んでくれ。この通りだ」

コーティカルテは頭を下げた。あの、自身に満ち溢れ、他人に媚

びることもなく、屈することも決してない、あのコーティカルテが、だ。しかも、先ほど会ったばかりの初対面の相手に頭を下げたところなど見たことはない。

「頭を上げてください、コーティカルテさん。そんなことをしなくても呼びますよ。向こうも探してるだろうしね」

ブライトはコーティカルテに優しく声をかけた。コーティカルテは頭を上げると、ありがとうございますと礼を言った。

「じゃあ呼びますか。悪いですが、单身樂團貸してくれませんか？ 自前のは今無いので……」
皆呆然としている中、いち早く気を取り戻したユフィンリーが、一台の单身樂團を持ってきた。

「ちょっと旧式ですが、手入れはしているので大丈夫だと思います」

「ありがとうございます。えーっと、大丈夫です」

ブライトはその单身樂團を背負うと、一瞬で展開した。そして一息つくつと、事務所の中の空気が一変した。

緊張感のある、しかし嫌な気はしない、神曲樂士が神曲を演奏するのには最高の空気である。そんな空気がこの事務所の中には満ちていた。

——ろお~~~~ん……。

ブライトは鍵盤を力強く叩いた。静かに、しかし力強く鳴り響く

Cの音。

——ろお~~~~ん。

続いて響いた音はE。このたった2音でフォロンは鐘の音を思い浮かべた。

その後も朗々と鳴り響き続ける、たった2音の3度の音楽。

たった2音。

それしか鳴っていないのに、フォロンは、レンバルトは、ユフィ
ンリーは、ペルセルテにプリネシカは、そして精霊であるコー
ティカルテは、この音楽が神曲であると感じた。まるで、神代に存在
するような鐘楼の鐘が、遙か彼方から響いてくるような。

そして、その音の中には、確かに2人の精霊の姿が見えた。

永遠に続くかと思える神曲は、実際には数十秒ほどで静かに終わ
る。夢の中にでもいたかのような気分になっていたフォロン達は、
ハッとすると、慌ててブライトのことを見た。だが、ブライトとコ
ーティカルテは扉の方を見ていた。

「来たか、アルトヴァース……」

コーティカルテがポツリと呟くと同時に、バンと勢いよく扉が開
き、一人の女性が飛び込んできた。

「ブライト!!! いきなりいなくならないで! 心配したんだか
ら!!!」

飛び込んできた女性は精霊。まっすぐに伸びた美しい金色の髪。清楚で、彼女の肢体を更に美しく見せるような長衣。そして背中に燦々と輝く黄金の六枚羽根。

上級精霊である。

しかし、コーティカルテは目を点にしていた。

「ア、アルトヴァースではない？」

するとコーティカルテの声に気付いたその精霊は、コーティカルテの方に顔を向けた。

「アルト？ アルトならすぐに来るわよ。ほら」

彼女が入口を指差すと、彼女の言うとおりもう一人が事務所に入ってきた。

「ブライト、探しましたよ。まさかコーティカルテと一緒にいるとは思いませんでした」

彼女は苦笑しながら事務所に入ってきた。

彼女の着る服の色は青。大海のように深い青色で、先ほど入ってきた精霊と同じように長衣を纏っていたが、彼女の服はもう少しどこか儀式を行うときに使うようなものに見える。髪の毛は砂浜に打ち上げる波のように静かに波打ち、見る人全てに優しい印象を与える。

そして彼女の背中にも羽根が六枚。その羽根はことさら美しく、

人の手が及ぶことのない海の、紺碧と言うに相応しい青の輝きを放っていた。

「アルトヴァース……アルトヴァース・ミラ・ストレアマーティ、なのか」

コーティカルテはアルトヴァースにゆっくりと近づいて行く。そして彼女の前で立ち止まると改めてアルトヴァースのことを見た。

「この感じ……確かにアルトヴァースだ……。生きて……いたのだな」

「ええ。ブライトに助けられました。久しぶりですね、コーティカルテ」

「ああ、本当に久しぶりだな、アルトヴァース。あの時は本当にすまなかった」

「いいのですよ。もう時は過ぎました。あなたが罪を感じることはありません」

そう言うアルトヴァースの姿は、正に女神のようだった。

ユフィンリーは驚愕していた。

フォロンが、行き倒れていたからと言って連れてきた男、カグヤ・ブライト。確かに、フォロンのように束ねている黒髪は女性のように艶やかだし、静かに寝息を立てている姿は、どこぞの絵画だ、と言いたくなっただけだ。それに天上天下唯我独尊のコーティカル

テが頭を下げたのだ。

この前代未聞な出来事を見て、ユフィンリーは急遽事務所を閉め、ブライトの話を聞くことにした。

「じゃあ、改めて自己紹介しましょう。私はカグヤ・ブライト。ついこの間第三公社に入った神曲楽士です。で、この2人は」

ブライトが促すと、最初にアルトヴァースが頭を下げた。

「私はアルトヴァース・ミラ・ストレアマーティと申します。ブライトの契約精霊です」

「私はヴィオリニスタ・パル・クラヴィア。アルトと同じ、ブライトの契約精霊よ」

アルトヴァースに続いて、もう一人の精霊——ヴィオリニスタも頭を下げた。

「私はツゲ・ユフィンリー。この事務所の所長をしています。それで、カグヤさんはここに就職したい、ということでしょうか？」

「ん、というよりも、そろそろ仕事を見つけないと生死に関わるというか……。主に食糧事情で」

「は、はあ……」

苦笑いしているブライトにユフィンリーは困惑してしまう。アルトヴァースとヴィオリニスタも恥ずかしそうに身を縮こまらせている。

「旅してきましたから、大抵のことは出来るんですが、仮にも神曲楽士ですからね。やはり、こういう事務所で働きたいですね。それにここにはアルトの知り合いも多いですし、何より社員の方々も優秀みたいですしね」

ユフィンリーは黙ってブライトの話を聞いていたが、よくこのブライトという人物のことを読むことは出来なかった。そんなユフィンリーの様子に気づいたヴィオリニスタは、クスクスと笑いながらユフィンリーに声をかけた。

「ツゲさん、やっぱりブライトの言うこと信じられないでしょ？」

「い、いえ。そんなことは……」

「いいんですよ。ほら、ブライト。そんな話し方じゃ、また怪しまれて追いだされてしまいますよ」

今度はアルトヴァースがブライトに突っ込んだ。ブライトは気まずそうに頬を掻いた。

「いや、これ、言わば面接だし」

「それで就職失敗率100%じゃ世話ないでしょ」

ヴィオリニスタに、ため息を吐かれ駄目だしされると、ブライトもため息をついた。

「それじゃあ……ツゲさん。真に失礼なのですが、普段通りに話してもいいですか？」

「は、はあ……。どうぞ」

流石にユフィンリーでも、この展開には着いていけず、生返事しか返せなかった。

「ふう……。じゃあいつもどおりにこんな感じで。これでいいんだろ？」

ガラリと変わったブライトに、満足げに頷く精霊2人。

「じゃあ、ツゲさん。続けてください」

「あ、はい。……とは言っても、カグヤさんの神曲楽士としての実力は、上級精霊2人と契約しているのを見る限り、相当のものだと思いますが……」

そこでユフィンリーが言い淀むと、ブライトの方から話を続けた。

「やはり、実際に聞いてみないとわからない？」

「はい」

ようやく調子を取り戻してきたユフィンリーは力強く頷く。やはり実際に神曲を聞いてみないと、ブライトという人物がどのようなかを見ることはできない。

「とはいっても、街中で勝手に神曲演奏するわけにもいかんし……」

「それなら大丈夫です」

「ん？　なんかあるのかアルト？」

「はい。ここに来るまでにお金になりそうな仕事を探していたのですが、まあ、色々ありまして、明日の朝一番に、トルバス神曲学院で演奏させていただけることになったんです」

にっこりと笑って言うアルトヴァースに、ブライトは嬉しそうに声をあげた。

「マジで！？　よかった……なんとか生き延びられる……」

「あ、あの、カグヤさん？」

「あ、こりやまた失礼。……というか俺がこんな区長で話してるから、ブライトって呼んでもらえると嬉しい」

「は、はあ。……ではブライトさん。今、学院で演奏をすると仰いましたが、私たちも聞きに行ってもいいですか？」

「ああ。思いつきり弾けるところもあんまり無いし、丁度いい。一応それで判断してほしい。他に審査が必要ならやるよ」

「分かりました。ではそれについては隨時お伝えします」

そこで一段落つき、それを見計らうようにプリネシカが新しいお茶を持ってきた。

「ありがとう……」

「あの……どうしましたか？」

「あ、えーと……いきなりですまないんだが、君、上級精霊と契約とかしてる？」

「え？ いえ。私は神曲楽士の資格を持っていませんが」

突拍子のない質問にプリネシカは首を傾げつつ答えた。

「そっか。いきなり変なこと聞いて悪かったな」

ブライトはそう言うと、誤魔化すように、プリネシカが持ってきたお茶を口にした。

それからいくらか話して、今回はお開きとなった。

「じゃあ、今日の所はこれで。また明日」

「はい。楽しみにしてますよ、ブライトさん」

ブライト達が去った後、ユフィンリーは皆を集めた。

「で……みんなはどう思う？」

「神曲の質で言えば、フォロンと同じレベルだと思いますよ俺は」
最初に答えたのはレンバルト。その言葉にユフィンリーも頷く。

「そうね。上級精霊2人と契約してるし、片方はコーティカルテと同じくらいの精霊なんでしょ？」

ユフィンリーは、コーティカルテに聞く。

「ああ。アルトヴァースは強い。神曲楽士がいなしとすると、昔の私が全力を出してようやく互角、と言ったところだ」

「コーティカルテと互角って……」

「もつとも、今のアルトヴァースがどんな状態かは分からんし、神曲楽士の實力にもよるがな。それよりも私はもう一人の精霊の方が気になったが」

「ヴィオリニスタ、って言ってたわよね。初めて聞いた名前だけだ」

「そつちも相当な實力持ちだぜ」

突然ユフィンリーの後ろから声がしたかと思うと、そこから精霊が現れた。

彼の名はヤーディオ・ウオダ・ムナグール。普通は狼型のベルスト形態を選択することが多いセイロウ枝族において、「人の姿の方が色々な戦い方が出来る」と言った理由で、フヌマビツク形態を取っている変わり種の精霊で、ユフィンリーの契約精霊である。

「どうしてわかるのよ？ ああ、あの精霊、何したってわけでもないのに」

「あのヴィオリニスタって精霊、コーティカルテや消えてた俺に
絶えず注意を払って隙の欠片も無かった。多分他の力も相当高いぜ。
なあ？」

ヤーディオの言葉に、コーティカルテも頷く。それを見たユフィ
ンリーは呆氣にとられたようにソファに寄りかかった。

「マジで？ そりゃ相当だわね」

「でも事務所で雇う、となるとそれだけじゃだめじゃないですか
？」

レンバルトの言うとおり、神曲楽士の仕事において、上級精霊が
絶対、というわけではない。むしろ依頼の種類によっては下級精霊
の方が役に立つ場合も多い。

「そりゃそうだけどね。まあいい。明日になればブライトさんの
実力も分かるし、今日のところはこれで終了。今日は残業はなしで、
明日h学院に直接集合。いいわね？」

「所長。僕、明日学院で授業をする日なんですけど……」

フォロンは月一で母校のトルバス神曲学院で特別講師として授業
をしているのだ。

「あ、そうだったわね。……もしかして」

「どうかしましたか？」

「もしかして、学院長。あんたにブライトさんの神曲を聞かせた

かったんじゃないかと思ってね」

翌日、フォロン達が学院の前に来ていた。

人気のあるツゲ神曲楽士派遣事務所の面々が正門の前に集まっているので、学院の学生たちは何事かと気にしていた。

「すみませーん！！ 遅くなりましたー！！」

ペルセルテがはあはあと言いながら走ってやってきた。プリネシカも後から遅れてやってきた。

「すみません、最後になっちゃいました」

「いやいや、時間通りだから大丈夫よ。それじゃ、行きましょうか」

ユフィンリーを先頭に一行は学院の敷地内に入って行った。

「そう言えばどこでやるんですか？」

「大型実習室よ。ほとんどの生徒入れるじゃない？」

「それにしても、楽しみですねフォロン先輩」

「うん。一流の神曲楽士の演奏なんて中々見られないからね」

フォロンもその《一流の神曲楽士》の一人なのだが、本人はあまり自覚していない。

「たった二音で神曲奏でるのだ。あの男、相当な楽士だぞ」

フォロンの隣を歩くコーティカルテがそうブライトのことを褒めた。

「珍しいわね。コーティがそんな風に言うなんて」

「馬鹿。私だって褒めることくらいあるわ。それにアルトヴァースと契約しているんだ。良くも悪くも普通の神曲楽士なわけがない。アルトヴァースはそれくらいの精霊なんだ」

そんなことを話しているうちに、一行は実習室についた。その中は生徒でいっぱいになっていた。中には講師もちらほらいた。そんな中に、後ろの方の席に、ある人物と精霊がいて、片方の男が、フォロン達を手招きしていた。

「みなさん、席を取っておきましたよ」

このニコニコ顔の男性はシダラ・レイトス。このトルバス神曲学院の学園長にして、《四楽聖》の一人である。どう見ても20代の優男にしか見えないのだが事実である。

そしてレイトスの隣にるのは、エレインドゥース・オル・タイトランテル。レイトスの契約精霊で、コーティカルテと同じ始祖精霊の支柱、《翠の精霊》である。落ち着いた、美しい女性の姿をしており、このような大勢がいる中で姿を見せるのは珍しい。現に生徒達はチラチラこちらの方を見ている。

「どうも、学院長」

ユフィンリーに続いて、フォロン達も頭を下げて挨拶する。

「そんなに畏まらないで下さい。ほら、座ってください」

レイトスに促され、皆席に着いた。

「それにしても、すごい人を見つけましたね」

「見つけたのはフォロンですよ。ねえフォロン？」

「え！？ あ、はい」

いきなり話を振られたので、少し大きな声で返事をしてしまうフォロン。

「ほう。やはり君には何かあるようだねえ」

「そ、そんなことは……」

「はは。まあ、今回は聞くことに専念しましょうか。ちらほら精霊たちも集まって来ているみたいですし」

レイトスはどこか面白げに空中を見ていた。フォロン達には見えないが、レイトスにはしっかりと分かるのだろう。

「彼らはレイトスのファンよ。いつも来てくれているわ」

後ろから声がしたので振り向くと、ヴィオリニスタとアルトヴァースが来ていた。2人とも昨日のような長衣ではなく、私服姿であ

る。

因みに、ヴィオリニスタは黒のYシャツにパンツスタイルと、彼女の美しいスタイルを更に際立たせている。

アルトヴァースは柔らかな白のニット生地 of 服にスカートと、彼女の優しい雰囲気にとってもよくマッチしている。

「おや？ 彼はどうしたのですか？」

「ブライトならトイレよ。始まる前に行っておくんですって」

「なので、私たちは先に来たんですよ」

そう言うときアルトヴァースはユフィンリーに頭を下げた。

「ツゲさん。今日は来てくださりありがとうございます」

「いいのよ。聞きたいって言ったのは私だしね。それより昨日の宿は大丈夫だったの？」

「はい。昨晚は一晩中レイ……コホン。学院長と一晩中飲んでましたから」

「え？」

「お二人とも、本当に一晩中飲み明かしていたんです。……全く、止めても止めてもやめようとしなから……」

珍しくエレインドゥースが疲れたように頭を押さえる。

「気があったからと言って、さっきまでずっと飲んでいたんですよ。まったく……ブライトさんも一向にやめようとしません……
……こんなに疲れたのは久しぶりです」

「ははは。あんなに楽しい夜は久しぶりですよ」

全く反省していないレイトスを見て、エレインドゥースは再び頭を押さえた。それを見たコーティカルテが珍しそうにエレインドゥースのを見る。

「ほう。《歩く氷河期》と言われたお前が珍しい。もしやブライトとかいう男のことを認めたのか？」

「あなたも、メリディアのようなことを言わないでください。……それに彼はアルトヴァースと契約した人物ですよ？」

「まあそうだな」

ここでコーティカルテはアルトヴァースのことを見る。

「それでどうなんだ？ お前の神曲楽士の腕前は？」

「ふふふ……それは楽しみです。ちょうどブライトも来たようですよ」

アルトヴァースの言うとおり、自前の単身楽団を持ったブライトがやってきた。

「お、来てくれたんだな。ありがとう」

「そんな。むしろ楽しみにしてましたよ」

その後一言二言交わすと、今度はレイトスに声をかけた。

「じゃあ、始めてもいいか？」

学院長に向かってため口のブライト。だが本人も隣のエレインドゥースに至っても、咎める様子は無い。

「はい。あ、それとこれがお題です。誰にも見せないで下さいね」

「お題って？」

レイトスに渡された紙を受け取りながら尋ねた。

「授業などでよくやるんですよ。きちんと精霊に指示出来るかを見るためにね」

「ふーん。分かった。一応聞くけど、大丈夫なんだよね？」

紙に目を通すとすぐにポケットに入れた。

「はい。そのために広い所を用意したんですからね」

「なら安心だ。アルト、ヴィーラ。行くぞ」

「はい。では皆さん、失礼しますね」

「楽しんでみてね」

ブライトは2人を連れて前の演奏スペースへ向かった。

すると、それに気付いた生徒達が少しざわついた。

「学院長、あの紙になんて書いたんです？」

「秘密です」

楽しそうに言うレイトスを見て、ユフィンリーは諦めてブライトの方を見るのだった。

演奏スペースに入ると、ブライトは単身楽団をセットした。

「にしても、見られてるなー」

ブライトの言うとおり、生徒達はブライト達のことを凝視している。

——ブライト達は知らなかったが、レイトスは《超一流の神曲楽士の聞ける》と生徒達に言っていたのだ。

だがブライト達はそんな視線におじけることなく、むしろブライトはそれすらも楽しんでいようだった。アルトヴァースとヴィオリニスタも同様である。

「まあ、それだけ注目されていると思えばいいんじゃない？」

「それもそうか。んじゃ、2人とも、準備はいいか？」

「ええ」

「はい」

2人が頷くを見ると、ブライトは一度息を吐いた。それを見た生徒達は始まるのを察したのか、静かになった。

ブライトは静かに鍵盤の上に指の乗せた。ポーンと高い音が鳴り響く。

それだけでこの部屋の空気が一変した。

———今日はパーティ。

準備するのも心が躍る。

でも、パーティに行くのにそんな服ではいただけない。

もっと綺麗なドレスを。

楽しそうにリズムよく。だんだんと色を増していく。

イメージされるのは黒と青。

オーダーメイドのドレスを仕立てるとき、一流の職人が選ぶように、その人に最も似合う色を見つける。

決して暗くなく、着る者を更に高貴に、美しく見せる艶やかな黒の色。

空よりも、海よりも、大自然の広大な青色にも負けない、実に見事な美しい紺碧。

そんな色が音楽に混ざると、静かに聞いていた二柱の精霊が片や漆黒の。片や紺碧の光に包まれる。

彼女達の影から服が消え、美しい裸体は新たな服に包まれる。

やがて光が収まると2人の姿が現れる。

アルトヴァースは青色の長衣を。

ヴィオリニスタは黒色の長衣を。

どちらも肩や胸元に切り込みが入っているが、淫？さよりも、荘厳さを感じる。

そして彼女達の背中には、金色の羽根と紺碧の羽根が出現する。共に優美で、壮大で、華麗で、精緻な文様を描いている。

この光景に、部屋にいる者全てが感嘆の息を吐いた。

—————さあ、着替え終わったらパーティ会場へ。

会場ではダンスを。ワルツのリズムで三拍子。優雅にゆっくり流れるように。

服の裾をも体の一部に。

たなびく裾はひらひらと。

たなびく髪はさらさらと。

少し光が心もとなく。ライトアップの手続きを。

ひと際目立つAの音。それを合図に、ブライトが奏でる円舞曲に合わせて、部屋に光が溢れる。

「わぁ……」

ペルセルテが目を輝かせる。

ボウライ達下級精霊がアルトヴァースとヴィオリニスタの周りに集まり、2人の舞に合わせて踊っている。

だんだんとブライトのピアノを弾くスピードが上がってくる。

初めはゆつくりと穏やかな曲調だったが、精霊が増えていくにつれて、だんだんとテンポの速い、楽しい曲に変わっていった。

——さあ、そろそろラストダンス。

テンポを上げて、みんなで踊ろう。

まだ、これでも足りないと言うなら。

「みんな出てこい!!」

ブライトの叫びと同時に、待ってましたと言わんばかりに、一斉に精霊達が出現した。部屋中にボウライ達下級精霊や中級精霊、中には上級精霊もいる。皆それぞれ、ブライトの神曲に、アルトヴァースとヴィオリニスタの踊りに合わせるように、そしてとても楽しそうに踊っている。

そんな楽しいパーティのラストダンスの曲も終わりに近づき、曲も最後に向けて駆けていく。そして——高々と鳴り響く音が室内に余韻を残し、音楽は終幕を迎えた。

室内から音が消え、精霊達も踊りを止める。静寂の中、ブライトが一息吐くと、室内中から万感の拍手が送られた。ブライトも、精霊達に祝福されるように囲まれていた。

「みんなありがとな。アルトとヴィーラもお疲れ様」

「どういたしまして。こんなに楽しいのも久しぶりね」

「私も楽しかったです。少し緊張してしまいましたが」

ブライト達が笑い合っている間も場内は拍手喝采となっていた。

生徒達が退出した後、実習室の中には、ブライト達とレイトスとエレインドゥース、ツゲ神曲楽士派遣事務所のメンバー。そして、先ほどの演奏で来た上級精霊四柱が残っていた。

「いやー、実に素晴らしい演奏でしたよ」

「いや、こちらとしても久しぶりに思いっきり弾けたよ。こっちこそありがとな」

「いえいえ、こちらこそ。生徒達にとってもとてもよい勉強となったでしょう。それにしても、こちらの精霊さん達はあなたのファンなんですか？」

レイトスはブライトの傍にいる上級精霊をチラリと見る。

フヌマビックが二柱、リカントラが一柱、ベルストが一柱。フヌマビックはどちらも女性で、

片方は、アルトヴァースやヴィオリニスタのような20代の女性のような姿をとっており、その切れ長の瞳が、少し冷たい印象を与える。銀色のポニーテールは彼女にとってもマッチしていて、着物のような服装は彼女をどこかエキゾチックに魅せる。

そしてもう一人は、小柄で身長はコーティカルテくらい。薄紫色の髪が腰辺りまで伸びて波打っている。フリフリがたくさんついたゴスロリの服が彼女の可愛らしげな雰囲気にとってもよく似合っている。

る。

リカントラの精霊も女性で、こちらは身長も高くスタイルもよい。褐色の体を窮屈そうに包む衣装は、シンプルなドレスのようで優雅。その周りには白い羽衣のようなヴェールが浮いている。肩のあたりで切り揃えられた、彼女の褐色の肌とは対照的な真っ白な髪は、彼女がリカントラである証である、九本の尻尾と狐の耳と相まって、どこか神秘的な、幻想的な雰囲気漂っていた。

そしてベルストの精霊の外見は、まさに白猫である。しかし背中にあるのは確かに上級精霊の証たる六枚羽根である。

他の三柱の精霊達にも六枚羽根が輝いている。彼女らから感じる力は並みのものではなかった。それを感じたレイトスは、興味深そうに笑みを浮かべる。

「なるほど……残っている精霊が彼女達だけなのは、それこそ彼女達がいるからなんですな」

「ああ。まあ、契約は出来ないって言ってるんだけどな。ずっと着いて来てくれてるんだ」

「ほう……それは珍しいですね。それに皆が強力な精霊のようですし」

「そうだな。フヌマビツクの大きい方がエリミエスタ。小さい方がルルカソルトワ。リカントラのがアウラで猫がポーレネイト。みんな結構昔からいる精霊らしいな」

「やはりそうでしたか。……それではもう一曲お願いしますよ。」

今度は彼女達がいいますし、生徒達もいませんしね」

レイトスの言葉にブライトは気まずそうに頭を掻いた。

「やっぱし気付いた？」

「ええ。先ほどの神曲はとても素晴らしい物でしたけど、彼女達の為の神曲とは思えませんでしたから。やはり私としては、そちらも聞いてみたいんですよ」

食えない笑顔でいるレイトスに、ブライトはため息をつきながら単身楽団を置いた。

「分かったよ。でも少し休憩させてくれ。ちょっと外の空気吸ってくる」

そう言う今回はユフィンリーに向かって言う。

「なんかそういうことになっちゃったから、勝手に悪いんだが、ちょっと待っててくれるか？ 合否云々はその後で頼む。……アルトとヴィーラは待っててくれ。後、ポー。一緒に来てくれるか？」

ポーと呼ばれたポーレネイトがピョンとブライトの肩に乗ると、ブライトは実習室から出て行ってしまった。

ボタンと扉が閉まると、ユフィンリーは我に返った。そしてレイトスに詰め寄る。

「ちょっと学院長！！ 今のはどういことなんですか！？」

「おやおや？　どうと言われましてもねえ。さつき私が頼んだのは『生徒達に一流の演奏を見せてください』というものでしたからね。大量の精霊を操ってください、とお願いしたんですよ。だから次は君の、ツゲ神曲楽士派遣事務所の採用試験ということと聞いていたので、彼には本当の神曲を奏でもらおうとしたんです」

「ですから、その本当の神曲というのは」

「そればかりは聞いてみないとわかりませんねえ。どうなんですか皆さん？」

そう言ってアルト達に尋ねると、一番に答えたのはエリミエスタだった。

「そうだな。主様の神曲は、それはそれは素晴らしいぞ。本当に契約したいと思う」

「そうだよね。アルトヴァースとヴィオリニスタが羨ましいよ」

「契約するまで、着いてく」

続けてルルカソルトワとアウラもブライトのことを称賛する。

「10年間、ずっと追いかけてきたんが、未だに契約してくれないのだ。主様の神曲はアルトヴァースとヴィオリニスタに向けられた神曲だが、それでもその神曲の傍にいたい。そんな風に思える神曲なんだ」

付け加えるように話すエリミエスタの表情は、まるで恋する乙女のようにうっとりとしていた。それを見たユフィンリーは更に驚いた。

契約した精霊ならば、その神曲楽士の神曲を求めるのは分かるし当然である。現にコーティカルテはフォロンの神曲を敬愛している。

だが彼女達3人やブライトについて行ったポーレネイトという精霊は違う。ブライトと契約していないのにも拘らず、10年もの長い間、彼の神曲を追い求めてきたというのだ。それに彼女達の様子を見る限り、彼女達はブライトの神曲に心底惚れている。それこそコーティカルテがフォロンの神曲に惚れているように。

しかし、フォロンはコーティカルテにしか神曲を奏でない。本当はフォロンと契約したいという精霊は沢山いるのだが。ともかく、ブライトはコーティカルテと並ぶ精霊二柱と契約し、それと同等の精霊達四柱を歓喜させる神曲を奏でるのだ。

そんな神曲とはどれほどまでのものなのだろうか。

聞きたい。

神曲楽士として。ツゲ・ユフィンリーとして。

真の天才が奏でる神曲というものを。

ユフィンリーは普段の彼女らしからぬ興奮を感じている。

しばらく待っていると、ブライトは帰ってきた。

ペルセルテはブライトが準備しているのを見てわくわくしていた。

彼女の周りには多くの『天才』と呼ばれる神曲楽士がいる。ユフィンリーやレンバルト、フォロン、そして今は亡き父——ユギリ・パルテシオ。

そんな彼らに引けを取らない、それどころかそれ以上かもしれない演奏を聴くことが出来た。それだけでも感動したのに、まだ本当の神曲を奏でたというのではないというのだ。

「ねえプリネ。さっきのカグヤさんの演奏凄かったね」

ペルセルテは小さな声で隣のプリネシカに話しかけた。

「うん。とても楽しくて、心に響く演奏だったわ」

「ブライトの神曲、気にいった？」

ペルセルテとプリネシカが話していると、アウラが2人の隣に来ていた。

「あ、えっと……」

「アウラ。アウラ・ムス・クライスザード。2人はペルセとプリネ？」

「あ、はい。私がユギリ・ペルセルテで、こっちがプリネシカです」

「うん、分かった。それで、ブライトの神曲気にいったの？」

「はい!! とっても素敵な神曲でした!!」

ペルセルテの元気な返答に、アウラは嬉しそうに笑った。

「そう。そう言ってもらえると嬉しい。ブライトも喜ぶ」

アウラはそう言いつつも、自分が褒められているかのように微笑んでいた。それを見たペルセルテは少し驚いた。

「あの……」

「ん、なに？」

「どうしてアウラさん達はカグヤさんと契約していないんですか？」

ペルセルテは自然に聞いてしまったが、アウラが少し寂しそうな顔したのを見て、しまったと思った。

「ご、ごめんなさい！！ 失礼なこと聞いちゃって！！」

「ん、大丈夫。気にしないで」

アウラが優しく言ったので、ペルセルテは安心した。

「でも、ブライトの演奏を聴いてみて。あれは2人の為の神曲だけど、とっても心地いいよ」

見ると、ブライトの準備も終わっていた。

「みんな、前に来たらどうだ。遠いとなんか寂しい」

そう言うブライトが持っているのはヴィオラ。先ほどのピアノではない。

「あれ、ピアノじゃないの？」

ペルセルテは皆と一緒に移動しながら首を傾げた。それに隣にいたアウラが答えてくれる。

「ブライトは元々ヴィオラ奏者」

「え！？ ピアノじゃないんですか！？」

これにはペルセルテだけではなく、レイトスやエリミエスタ達以外、皆が驚いていた。

普通神曲楽士は一つの楽器しか使わない。レンバルトのようにギターからサククスに持ち替える者もいるが、少数派だし、レンバルトも今はサククスを使っている。それは天才と呼ばれるユフィンリーもそうだし、コーティカルテと契約しているフォロンもそうである。彼らは一つの楽器を極め、素晴らしい神曲を奏で、精霊を呼ぶ。

ブライトも素晴らしい神曲を奏で、数え切れないほどの精霊を呼び、彼らに的確に指示をした。ツゲ神曲楽士派遣事務所も才能豊かな若手が集まっていると言われるが、ブライトのはそれらをも凌駕する。

フォロンはコーティカルテという強力な精霊を心底惚れさせるような神曲を奏でるし、レンバルトは下級精霊を何百何千と集めるような神曲を奏でる。だが彼らは極端であるが故に、逆のことは出来

ない。フォロンはコーティカルテ以外の精霊を呼ぶことは出来ないし、レンバルトは中級以上の精霊を呼び出すことは出来ない。どちらが優れているというのではない。ただ種類が違うだけだ。

だが、どちらも兼ね備えた人物とはどれほどの者か。

レンバルトのように何百何千とも言える精霊達を集め、フォロンのように超級も上級精霊と契約している。

しかし、レンバルトとは違い、下級精霊だけでなく中級・上級精霊も呼び集め、フォロンとは違い、アルトヴァースというコーティカルテに並ぶ精霊に加え、それに劣らぬヴィオリニスタという上級精霊とも契約し、他にも四柱の上級精霊から契約を申し込まれている。

それに今の神曲も素晴らしかった。自分達が及ばないくらいに。

しかしそれすらも凌ぐ神曲とは一体どんなものなのだろうか。

《四楽聖》のクダラ・エリミアでさえも、契約しているのは中級精霊が六柱。数だけ見れば同等。質を見れば、中級と上級という大きな差。

ということは、カグヤ・ブライトという男は《四楽聖》とも並ぶ実力の持ち主なのではないか。

最高の神曲楽士と名高い彼らと同等の神曲楽士なんて聞いたことない。

皆それぞれのことを考えている内に、ブライトは弓を弦に置く。やはりそれだけで会場の空気を変えた。

だがその空気は全体に向けたものではなく、むしろ範囲は狭く、アルトヴァースとヴィオリニスタだけに向けられていた。

三人が目で合図するとブライトは神曲を演奏し始めた。

———愛。

心から通じ合う愛情。

それはとても心地よく、温かい。

互いが信頼しあい、身を寄せ合い、心を通い合わせる。

喜び、歓喜し、感動し、ずっと一緒と言わんばかりに体を抱きしめる。

共にいることこそが幸せ。

共に過ごすことこそが幸せ。

これ以上の幸せなんて、ない。

最後の音が、止んだ。だが誰も言葉を発さない。

——ポトツ

そんな中、小さな音がした。それは涙を流した音。

「あ、あれ……？」

涙を流していたのはペルセルテ。ようやく涙を流しているのに気がついたペルセルテは、困惑してしまった。

そんなペルセルテにブライトはペルセルテにハンカチを渡した。

「気にいってくれたみたいだな。ありがとう」

「あ、いえ。こ、こちらこそ……！」

ペルセルテの慌てた様子に少し笑うと、ブライトはユフィンリーの方に行った。

「まあ、こんなところだ。どうだった？」

「ええ、とても素晴らしい神曲でした。採用については……今日の夜に」

「分かった。じゃあ、その頃になったら、行くわ。楽しみにしてる」

そう言うと、ブライトは単身楽団の片づけを始めた。

「じゃあ、私たちは帰りましょうか。フォロンはこの後の講義頑張ってるね」

そこでユフィンリーの話聞いていたブライトが近寄ってきた。

「あれ？ タタラも講義するの？」

「はい。今日の午後から」

「そっか。なら俺も見学させてもらおうかな。教え方とか参考にさせてもらいたいし」

「教え方って、カグヤさん、何か教えるんですか？」

「ああ。それがな……未だに宿なしなもんで、今日もここに止めさせてもらうんだよ。んで、その代わりに放課後講義をしてくれて頼まれたの。な、学院長？」

ブライトはレイトスに話を振る。

「ええ。働かざる者食うべからず、ですしね。そうだ、皆さんも見ているかがでしょうか？ 席を取っておきますよ」

「そう、ですね。では……六人分、お願いできますか？」

「はい。了解しました」

レイトスはなぜか嬉しそうな笑みを浮かべていた。

ユフィンリー達が帰った後、大講堂に残ったのは、ブライトとア

ルトヴァースとアウラ、レイトスとエレインドゥースだった。ヴィオリニスタ達他の精霊はトルバスの町の見学しに行った。

「どうでしたか、彼らは？」

「どうもこうもねえ……俺が改めて教えることなんてないと思うけどな。あいつらはみんな分かってるだろ。大切なことはな」

「ええ、それは私も保証します」

「そうか。ま、あいつらには感謝してるけどな」

ブライトの雰囲気が変わる。どこか悲しく、後悔しているような。それに伴いレイトスの表情も曇る。

「……あれは、あなたの責任ではありませんよ」

「そう言ってもらえるのは嬉しいけどな。でもやっぱり、あの時あいつのことを止めてたらって思うとな」

ブライトの自嘲的な呟きに、レイトスは口意を閉じる。しばらく誰も声を出さない状態が続いたが、ブライトが立ち上がった。

「おや？ どちらへ」

「ん？ ちょっと昼寝もとい朝寝でもしようかと思ってな。なんだかんだで徹夜明けは疲れる。中庭にいると思うから、何かあったら、呼んでくれ」

ブライトはそう言うと言アルトヴァースとアウラと一緒に講堂を出

た。

残されたのはレイトスとエレインドウースの2人だけ。レイトスはふう、とため息を吐くのだった。

中庭に到着したブライトは、丁度良木を見つけた。

「お、良さげな木陰発見、っと」

ブライトは早速と言わんばかりにその木の下に座りこんだ。

「ふわぁ……流石に徹夜で飲み明かした後に神曲やるのはきついな」

「あら、やっぱり疲れてたんですね。はい、どうぞ」

アルトヴァースはブライトの隣に腰かけると、ブライトを寝かせて自分の膝にブライトの頭を乗せた。

「お、ありがと。アルト」

「はい」

アルトヴァースはにっこりと笑みを返す。アウラはその光景をじっと見ていたかと思うと、ブライトの隣にころりと寝ころんだ。

「仲間外れ……いや」

アウラはブライトの腕にギュッと抱きついた。

「ははっ、ごめんなアウラ」

「ん、許す」

アウラはそのまま自分の尻尾をブライトの体に乗せた。アウラの尻尾は見るからにフカフカで、気持ちよかったのかブライトはすぐに寝息をたてて眠ってしまった。

「ふふふ、ここは本当に心地が良い」

アルトヴァースはブライトの額を撫でながら、風の感触に目を細める。

「ねえアルト」

そこに、まだ眠っていなかったアウラがアルトヴァースに声をかける。

「何かしら？」

「やっと、旅、終わったね」

「……ええ、そうね」

アルトヴァースはどこか哀しそうな笑みを浮かべながら答えた。

「これでこの方の心も癒えてくれれば良いのですが……」

「違う」

「え？」

アウラの予想外の返答にアルトヴァースは声を上げた。

「癒えるんじゃないくて、癒す。私が……ううん、ヴィーラも、エリーも、ルルカも、ポーも、そしてアルト、あなたも。みんなでブライトを癒す」

「アウラ……」

アルトヴァースはアウラの顔を見つめる。やはり眠そうだが、その目はしっかりとアルトヴァースのことを見つめていた。

アルトヴァースは笑みを零すとアウラの頭を撫でた。

「そうね。あなたの言うとおり」

「うにゅ……」

「ふふっ、あなたも休みなさい。疲れてるでしょう？」

「ん……そうする」

アウラは気持ちよさそうに息を吐くと、そのまま静かに寝息をたて始めた。

とても気持ちよさそうに眠る2人を見て、アルトヴァースは喜び

を感じた。

「ブライト。これからは私が、私達があなたを救います……」

アルトヴァースはブライトの額に口づけすると、暖かな風に、アルトヴァース自身も眠りに着いてしまったのだった。

頼まれていた講義をするために、フォロンは学院に戻って来ていた。コーティカルテの提案で昼食を中庭で取ることにしたので、食堂で昼食を買って中庭に来たのだが。

「何だあの女子たちは？」

「さあ？」

コーティカルテの視線の先には、中庭にある木を中心に女子生徒達が集まってキャーキャーしていたのだった。男子生徒もいるにはいるが、女子たちの熱気を前にしては無力であった。

「ん……アルトヴァース？」

「アルトヴァースって、カグヤさんの精霊の？」

「ああ。とは言っても、アルトヴァースはこうやって大勢の前に出るような奴ではないと思ってたが……」

「じゃあ行ってみる？」

「うむ、そうだな」

2人は女子生徒達に謝りながら（これはフォロンだけだが）人垣を抜け、中心に出た。

するとそこには気持ちよさそうに仲良く眠る、ブライトとアルトヴァースとアウラの姿があった。

「何をしてるんだ、こいつらは？」

「寝てるんだろうけど……起こした方がいいのかな？」

フォロンが悩んでいると、周りが騒がしいのに気がついたのか、アルトヴァースが目を覚ました。眼ぼけ眼であたりを見渡すと、周りの状況に気が付き、小さな声で、あら、と言うと、ブライトの頭をトントンと叩いた。

「ブライト、起きてください」

「ん……？ ……おお、すっかり寝入ってた。ほら、アウラも起きてくれ。じゃないと起き上がれん」

ブライトは自分の横ですやすや眠るアウラの頭を優しく揺らして起こした。アウラはムーと呻きながらも目を覚ました。

その光景は実にほのぼのとしており、周りの女子生徒達も顔を赤らめて見ていた。が、コーティカルテは呆れたように見ていた。

「なーにをしとるんだお前達」

「あら？ コーティカルテ。どうしたのですか？」

「あのな……それはこっちのセリフだ。よくもまあ、こんな場所で眠れるな」

「コーティもたまに寝てるけどアイタツ！？」

ボソリと呟いたフォロンの足を思いっきり踏みつけるコーティカルテ。

「余計なことは言わんでいい」

「はい……」

フォロンがため息を吐いていると、起き上がったブライトがフォロンの手元の時計を見た。

「あ、もうお昼か」

「はい。コーティがここで食べたいと言ったので来たんですけど……」

フォロンは言葉を濁しながら周りを見回した。

周りを見れば人、人、人。決して落ち着いて食事が出来るような状況ではない。これにはブライトも苦笑気味。

「あら、なんか人ばっかだな。仕方ない、確か食堂があったよな。そこで食べようぜ」

ブライトは立ち上がると、アルトヴァースとアウラを連れて食堂に向かいだした。

因みに周りにいた生徒達は、ブライトが起きた辺りから離れていた。

「ん？ どうした2人とも。早くしないと席がなくなるぞ」

呑気なブライトの様子に、フォロンとコーティカルテはそろってため息を吐いたのであった。

「じゃあブライトさんは特別講師なんですね」

食事を終えたブライト達は、フォロンが講義を行う教室に向かっていた。ブライトも見学したいと言うので、同行しているのである。

「そ。宿代としてな。前金は貰ってるけど」

「そう言えばブライトさん、今日も学院に泊るんですか？」

「そのつもり。色々あってホテルは使えないんだよ」

ブライトは苦笑いしながら言った。これにはフォロンも首を傾げたが、ブライトもアルトヴァースも苦笑いをするだけだった。

「ま、そんな深刻な理由ってわけじゃないから気にしないでいいぞ。ほら着いた。俺は後ろの方の席にいるから」

そう言うのとブライトは後ろのドアから入ってしまった。

「……じゃあ、僕らも入ろうか」

フォロンとコーティカルテが教室に入ると、やはり、と言うべきか、中の生徒達は一番後ろの席に座るブライト達のことを気にしていた。しかしそれでは授業にならないので、フォロンは教壇に立つと注目させるために手を叩いた。

「みんなおはよう。授業を始めるので前を向ってください」

フォロンの呼びかけに流石に生徒達は前を向いた。

「うん、今日も全員居るね。と、授業を始める前に、今日はカグヤ・ブライトさんがこの授業を見学しに来ています。とは言っても普段通りの授業だけだね。ブライトさんも放課後に特別講義をするそうなのでそっちにも行ってみてくださいね。じゃあ今日はこの間の復習から……」

授業が始まると、コーティカルテは早々にブライトの隣に向かった。

ブライトは生徒達のようにノートを取っているだけでもなし、ただ楽しそうにフォロンが説明している様子や生徒達がフォロンの話を聞いている様子を眺めているだけだ。

「楽しそうだな」

「まあ、楽しい。というよりも珍しい、かもな。俺は独学で神曲

勉強したクチだからな。学校みたいなのには通ったことがないんだよ」

「やはりか。お前の神曲は独自性が強いからな」

「でもまあ、ヴィーラに色々教えてもらってんだけどな」

「ヴィーラ、というのは、ヴィオリニスタ・パル・クラヴィアだ
な。《黄昏の芸術家》の」
トワイライト・アーティスト

それを聞いたブライトは驚いた顔でコーティカルテを見つめた。

「知ってたのか？ ヴィーラのこと」

「当たり前だろうが。あんな大物、すこし古い精霊なら誰でも知
っている。それにな、他の四人だって知っている。《花咲く闇夜》
フラワリング・ナイト

《無邪気な我が儘娘》インセント・スボボルトカトルプリンセス《幻想姫》クラウン・クラウン《道化の王様》とくればあの神曲
を聞いた精霊達が帰ってしまったのもよく分かる。というか、どう
して契約しないのだ。普通なら一流の神曲楽士が土下座をしても顔
色一つ変えずに吹き飛ばしてしまうような奴らだぞ」

「まあ……色々あるんだよ。色々」

複雑そう言うブライトに、コーティカルテはそれ以上言えなくな
ってしまった。

「ま……先は長いのだ。ゆっくりと考えればいいさ」

「はいはい、どうも」

チャイムが鳴り、フォロンの授業も終わる。生徒達も片付けるなり、フォロンに質問するなりしていた。ブライトはその様子をボーっと見ていたのだが、二人の女子生徒がブライトに近づいてきた。

「あ、あの……」

「ん、何かな？」

話しかけたのはいいが、二人は緊張しているようでもじもじしていたが、意を決したのか片方の女の子がブライトに話しかけた。

「あ、あの!!」

「うわお？ 何事？」

「えっと……カグヤさんは上級精霊と契約していると聞きました」

「それで、その……お願いしたい事があるんです」

「お願い？ 何かな？」

「えっと……羽根を見せて頂きたいんです」

「羽根って、アルトのか？」

女の子はコクコクと頷いた。

「上級精霊の羽根はとても綺麗だって聞きました。でも私達一年

生だからあまり見たことがなくて……。それに、さっきのカグヤさんの演奏も行けなくて……。だから……」

女子生徒は不安そうにブライトの様子をうかがっていた。

「んー……どうするアルト？」

「別にかまいませんよ。そうだ、アウラも見せてあげたらどう？」

「ん？ ん……」

相変わらず眠そうなアウラは、目をこするとパツと羽根を広げた。続けてアルトヴァースも羽根を広げる。

「わぁ……！！！」

女の子二人は、アルトヴァースとアウラの羽根を見て、子どものように顔を綻ばせて喜んだ。

「すごいすごい！！ とても綺麗です！！！」

「あの……触ってみてもいいですか？」

片方の女の子が恐る恐る尋ねたが、アルトヴァースは首を横に振った。

「ごめんなさい。触っていいのはブライトだけと決めてるの」

「私も」

「そうですか……ごめんなさい。失礼なことを聞いてしまつて」

二人がしゅんとなつてしまったので、アルトヴァースは優しく二人に微笑みかけた。

「いいですよ。そうですね、あなた達も精霊と契約してみてください。きっとあなた達と契約した精霊は触らせてくれると思いますし、他のどんな精霊の羽根よりも美しく見えると思いますよ」

「は、はい!!」

二人は嬉しそうに返事をした。そこにブライトが声をかけた。

「なあ。君たちは精霊は好きか？」

「え？ あ、はい!! 大好きです!!」

「私達、精霊さん達に喜んでもらいたくてここに入学したんです!!」

笑顔で語る女の子達の表情は純粹で輝いて見えた。

「君達、名前は？」

「はい！ キサラ・メディアです」

「私はシシノキ・ルーミアです」

「メディアとルーミアね。俺のことはブライトって呼んでくれ」

名前で呼んでいいと言われ喜ぶ二人。その様子を見て、ブライトやアルトヴァースはニコニコしていた。見られていることに気付いたメディアとルーミアは顔を赤らめた。

「す、すみません。はしゃいじゃって」

「いいっていいって。それより時間は大丈夫か？」

いつの間にか教室には他の生徒がおらずガランとしていた。

「あー！！ やっぱいい、遅れちゃう！！」

「ごめんなさいブライトさん！！ 失礼します！！」

大慌ての二人は嵐のように去って行った。

メディアとルーミアがいなくなり静かになった教室。フォロンもブライトの傍に来た。

「賑やかな子たちですね」

「おう、お疲れさん。んじゃ、俺も準備しなきゃいかんから、学院長のところに行くてくるわ。またあとでな」

そう言うときブライトは教室を出て行ってしまった。

「あ、はい。ねえ、コーティはブライトさんと何を話していたの？
　　なんだか嬉しそうな顔してるけど」

「ん、いやな。将来が楽しみな者を見つけたのでな。ふふ、あそ

ここまで素直なのはペルセルテ以来だ」

コーティカルテがやけに嬉しそうに語るのを見て、フォロンはいまいち理由が分からなかったが、何だかんだ言ってコーティカルテが嬉しそうなので、フォロンも嬉しく思うのだった。

「————つーことで、神曲っていうのは確固とした形、ってのはない」

ブライトは教壇に立って講義を進める。

場所は大講堂。普段は空席が目立つ教室だが、今日に限っては満席で立ち見まで出ている。皆ノートやメモを取っており、居眠りはおろか私語を交わす者すらない。

専門課程だけでなく、メディアやルーミア達基礎課程の学生も多くおり、講師も沢山いる。

「クラシックでもいいしジャズでもいい。ロックもあるし民謡なんてのもありだな。テンポもそうだし、楽器もそうだ。でもな、一番大切なのは、何に向けて神曲を奏でているか、だな」

ブライトはマイクを取ると、教壇から降りて歩きながら講義を続ける。

「君たちは何故神曲を奏でる？ 何に向けて奏でる？ まあ、そんなのは人それぞれだから詳しいことは省くが、これがはっきりしていないと、どんなに演奏が上手かろうと、それは神曲には成り得

ない。逆にいえば、演奏が拙くても、その答えをしっかり持っていれば神曲には成りうる。ま、これは常識だ」

そこまで言うとはブライトは一端立ち止まった。

「だが、常識であるが故に意識がしにくい。そうだな……例えば基礎課程。君たちは自分が何のために神曲を奏でているのか、しっかり考えているか？」

この質問には、専門課程の生徒や講師の面々は得心したように頷いていた。彼らはその壁を乗り越えたメンバーなのだ。逆にその答えを得ていない基礎課程の学生の大部分は、首を傾げている。

「まあ、これは他人から教えてもらうもんじゃないからな。自分で気付くしかない。だから今から言うことは答えではなくヒントだ。もちろんこのことを心得ている奴にとっても大切なことだから、しっかりと聞いてくれ」

ブライトは再び歩き始め、説明を始めた。

「みんなは精霊のことを見ているか？ 彼らの姿や能力だけじゃなくて、その時の調子や機嫌の良し悪し。それに会話をしているか？ そりゃ予習復習課題云々で忙しいのは分かる。でもな、時間を作ってでも彼らと会話をしろ。精霊は俺達神曲楽士にとって最高の教師だ。神曲を奏でるのに、精霊のことを知らないんじゃ仕方ないだろ？ 当然ながら神曲を奏するときには色々なことを考えないといけない。相手が何を見ているか、何を聞いているか、何を考えているか、何を欲しているか。はたまた、周りの雑音についても考慮しなくちゃいけない。ま、よく見ろ、つてのはこういうことだ。というか、これは精霊に限らず、人間同士のコミュニケーションにだっ

て必要なことだけだな。……そうだな、一度例を見せた方がいいかな」

するとブライトは誰かを探すかのように辺りを窺う。そして真ん中のあたりに座っていたある生徒を見つけた。

「お、いたいた。メディア、キサラ・メディア。前に出てきてくれ」

いきなり指名されたメディアは、驚きで動転していたが、隣のルーミアに押されて逃げ場なしと観念したのか、恐る恐る前に出てきた。

「よし来たな。アルトとヴィーラもこっちに来てくれ」

後ろの方に座っていたアルトヴァースとヴィオリニスタも前に来た。朝の演奏もあってか、二人の美しさに皆息を呑む。

「はい、というわけでメディアには二人にある指示を出してもらいたい。もちろんさ神曲でな。メディア、単身楽団は俺のを使ってもらうけど、ピアノで大丈夫だったか？」

「は、はひ！？　だ、大丈夫でふっ！？」

メディアは緊張のあまり思いっきり舌を噛む。会場から笑いが起こってしまい、メディアは縮こまってしまったが、ブライトはマイクのスイッチを切ってメディアに話しかけた。

「緊張しすぎじゃないか？」

「だ、だってえ……私こんな大勢の前で演奏なんて……。それに神曲なんて弾けませんよお……」

メディアはまだ基礎課程の一年生。まだまだ神曲を奏でるところか単身楽団の展開もままならない。

「いいか、メディア。神曲ってのは思いの力だ。お前は精霊が好きなんだろう？」

「はい……大好きです」

「ならその思いを音楽に込めろ。神曲っていうのは精霊を操るものじゃない。精霊と心を通わせることが出来る音楽を神曲と呼ぶんだ」

「え？」

ポカンとするメディアを見てブライトも笑う。

「ははっ。簡単に言えば音楽を楽しめ、てことだ。そして精霊も楽しませろ。精霊のこと、好きなんだろう？」

「あ……はい！」

「よし。なら早く準備しろ。なんだかんだで待たせてるからな」

はい、と返事をするメディアの顔は先ほどまでとは違った顔つきになっていた。

「さてと、待たせて悪かったな。メディア、準備はいいか？」

「ええ！？　いくらなんでも早すぎですよお」

キリッとした表情から一転、フニヤリと情けない顔となってしまった。会場から再び笑いがおこり、今度はルーミアまで笑っていた。恥ずかしくなって顔を真っ赤にしつつ、単身楽団の用意を終えた。

「今度こそ終わったな。んじゃ、これがお題な」

ブライトは紙を渡すと後ろに下がった。

メディアは紙を確認するとアルトヴァースとヴィオリニスタのこのを見つめる。そして何かを確かめるかのように一度だけ頷くと、鍵盤に指を置いた。

——彼女の弾く神曲はとても楽しく、聞いているだけで気分が盛り上がる。まだまだ未熟なところもあるが、それもまた可愛らしい。

アルトヴァースとヴィオリニスタは頬笑みを浮かべ、お互いに頷きあうと、メディアの音楽に合わせて踊り始める。

テンポに合わせて、楽しそうに、可憐に踊る。

ブライトとの演奏の時のような、見る者全てを魅了するような踊りではないが、二人はとても楽しそうに踊っていた。

「ふう……」

演奏を終えたメディアが鍵盤から手を離すと、教室のあちこちから大きな拍手が起こった。

「わわ！？　ブライトさーん！？」

あまりの拍手の大きさに驚いて、メディアはブライトに泣きついた。

「なに泣いてんだよ。いい演奏だったぞ。ありがとな、席に戻ってくれ」

頭をポンポン撫でられながらメディアは単身楽団を下ろすと自分の席に戻って行った。

「というわけでどうだった？　メディアは基礎科の一年だが、今のは神曲となっていたな。そうだろ、アルト、ヴィーラ」

その言葉にアルトヴァースとヴィオリニスタも頷く。これには見ていた学生たちはどよめいた。

「みんな驚いてるな。でも考えてみる。神曲というのは専門課程には入れないと奏でられないものなのか？」

ブライトの問いに、多くの学生が首を傾げる。ツゲ神曲楽士派遣事務所のメンバーは理解していたが、学生にとっては少々難しいようだ。

「これは俺からは言えない。自分で気付かないと意味がないからな」

そこまで言うとはブライトは会場に向けた視線を強めた。

「目的と手段を間違えるな。これを間違えてしまえば決して神曲楽士にはなれないし、もし、なれたとしても大成しない」

ブライトの力のこもった言葉に会場一同息をのむ。するとそこに、この緊迫した空気を断ち切るかのように、チャイムが鳴った。ブライトは眼元から力を抜く。

「おっと、もう時間みたいだな。んじゃ、今日はこれで終わりにするが、最後に行ったことについてはしっかり考えてくれ。皆が立派な神曲楽士になれることを願っている」

ブライトがマイクを置くと、会場から盛大な拍手が起こった。

拍手も鳴りやみ、学生達も次々と講堂を出ていく。もう七時なので残る学生はいなかった。

「あれ、学院長は？」

「あ、学院長なら先に戻っている、って言ってましたよ」

「そっか。あ、それとありがとな、わざわざ見に来てくれて」

「いいのよ。私達としても社員となる人物の考え方を知っておきたかったしね」

そう言うユフィンリーにブライトはにやりと笑う。

「お、ということは期待してもいいのかな？」

「ええ。合格よ。これからはあなたもツゲ神曲楽士派遣事務所の一員よ」

「なら、俺も所長、って呼ばないといけないな」

二人は話している内におかしくなってきた、クスクス笑い出してしまった。

「じゃ所長、俺は学院長に行って報酬貰ってきますね。じゃなきゃ夕飯にもありつけん」

するとユフィンリーは突然にやにやしだした。

「それなら、今日は私が奢ってあげるわ。というかね、あなたの歓迎パーティをしようってペルセルテが言うからもう場所をセットしちゃったのよね」

ペルセルテを見ると、恥ずかしそうにえへへと笑っていた。

「ほほう、なら喜んで参加しよう。なら急いで金をねだってくる。みんな校門で待っていてくれ」

そう言うときブライトは出て行ってしまった。

「じゃあ私達は校門で待ってましようか。あなた達も来るわよね？」

「よろしいのですか？」

「もちろんよ。あなた達は契約精霊でしょ。他の四人も来るわよね？」

その言葉にアウラ達は喜んだ。

「ありがとうございますユフィンリーさん」

「いいのよ。でもそんなに高い所には行けないけどね」

「そんな、連れて行ってくれるだけで嬉しいです」

そうして、ユフィンリー達は一足先に校門へと向かったのだった。

「それでは、ブライトさんの入社を祝って、カンパニー！！」

「「カンパニー！！」」

ペルセルテの音頭によってブライトの歓迎会はスタートした。

「ツプハー！！ うまい！！」

「おっ、ブライトさんいい飲みっぷり」

「いやいやレンバルト。こんなんまだまだ序の口だぞ。やる気になればこの店の酒をなくすくらいは出来る」

「そんな金はないからやるなら自腹でやりなさい」

「んならやらん。また無一文になる」

「ははは……」

ブライト達のやり取りに、フォロンやペルセルテ達は苦笑気味である。

「ほらアウラ。もっと落ち着いて食べなさい。食べ物には逃げないんだから」

「むぐむぐ……分かった」

「ねえエリー。そこの中から揚げ取って」

「分かった分かった……ほら」

「ありがとう」

アルトヴァース達も楽しく食事をしていた。

みんな私服を着ており、アルトヴァースとヴィオリニスタは前に来ていた服と同じ服装を、エリミエスタはノンスリーブのシャツとパンツスタイル、ルルカソルトワは可愛い可愛いゴスロリ服、アウラも意外と可愛い可愛い白い服を着ていた。皆それぞれ美人だったので、わいかったり、アウラは九本の尻尾を出していたりしたので、

周りからは注目の的である。

そんな様子をペルセルテは珍しそうに見ていた。

「ん？　どうかしたかペルセルテ」

「いえ、精霊達がこんなに食事をしているのもあんまり見ないものですから」

「ああ、そういやそうかもな。しっかしこいつらは食うのが好きなんだよ、特にアウラが」

チラリと見るとアウラは表情を変えないでもぐもぐと食べていた。その隣ではアルトヴァースがアウラの口を拭いてあげたりと何かと忙しそうだ。そんな二人のどこか微笑ましい様子にみんな微笑んでしまった。

「ハハ。これでは《幻想姫》が型なしだな」

コーティカルテが何気なしに言ったこの一言に、ユフィンリーが食いついた。

「《幻想姫》って、それ本当!？」

「む？　違うのか？」

「ムグ……ううん、合ってるよ」

アウラは食事を続けながら頷いた。

「おいおい、マジかよ」

「え？ レンバルト知ってるの？」

「えっ！？ フォロン先輩知らないんですか！？」

「う、うん」

フォロンは困ったように頷く。

「《幻想姫》って言うのは、とある精霊の二つ名なんです。少し前にスピリットマガジンの特別号が出たんですけど、そこに《最高の精霊達》っていう特集が組まれていたんです。それで、その中に名前や姿を出したくない、っていう精霊もいて、二つ名だけしか出していない精霊が何人かいたんです」

「でそれ以来《幻想姫》は《神曲楽士が契約したい精霊》のランキング上位にいるってわけ」

「へえー」

ペルセルテとレンバルトの説明に、感心したように頷くフォロン。

「そういえば前にそんなの来たな」

「うん。貰ったお菓子、おいしかった」

「あ、そうだ。それならみんなで自己紹介しようか。ね、ブライト」

「そうだな。じゃあ俺から。名前はカグヤ・ブライト。楽器はヴィオラとピアノ。契約精霊はアルトとヴィーラ。これからよろしくな」

「私はアルトヴァース・ミラ・ストレアマーティです。皆さん、これからよろしく願いしますね」

「次は私ね。私はヴィオリニスタ・パル・クラヴィア、みんなヴィーラって呼んで。これからよろしくね」

「因みに、アルトが《不滅の女帝》で、ヴィーラが《黄昏の芸術家》な」

「ト、トワイライトアーティスト……」

「なんつー大物よ……」

ヴィオリニスタの二つ名にユフィンリーとレンバルトは絶句してしまう。

「む、次は私か。私の名はエリミエスタ・ルイゼ・フェリオン。《花咲く闇夜》とも呼ばれているが、気軽にエリート呼んでくれ」

「私はルルカソルトワ・サージ・オルタート。ちょっと長いからルルカって呼んでね。それで二つ名は《無邪気な我が儘娘》。みんなよろしくね」

「……ん、私？」

「そうよ。まずはお箸を置いてからよ」

アルトヴァースに言われたとおりに箸を置くアウラ。

「んと……名前はアウラ・ムス・クライスザード。狐のリカントラで、自慢なのは九本の尻尾。二つ名は……《幻想姫》……よろしくね」

自分の自己紹介を終えるとすぐに食べるのを再開するアウラ。あんなアウラの様子にブライトが苦笑いしていると、ブライトの肩に白い猫が飛び乗った。

「おっと、お前の紹介もしないとな。こいつはポーレネイト・テオ・ピグマート。俺たちはポーって呼んでる。二つ名は《道化の王様》だ。見ての通りベルストだが、一応喋れる。まあ、俺達にも滅多に話しかけないけどな。ほら、頭下げろ」

ブライトに言われ、ニャーと鳴いてからぺこりと頭を下げるポーレネイト。その可愛らしい仕草に、ペルセルテが目を輝かせた。

「キャー！ ポーちゃん可愛いです！ 抱っこしてもいいですか？」

「もちろん。ほい」

肩に乗るポーレネイトをヒョイと持ち上げると、そのままペルセルテに渡す。

「キャー！！ フカフカで可愛いです！！」

ポーレネイトのことを思いっきり抱きしめるペルセルテ。ポーレ

ネイトは苦しいらしく、ブライトに向かって助けを求めているが、あえて無視していた。

「それにしても、『幻想姫』だけじゃなくて、『黄昏の芸術家』に『花咲く闇夜』、『無邪気な我が儘娘』に加えて『道化の王様』までいるなんて……」

「それに、アルトヴァース、『不滅の女帝』もいるぞ。皆、相当の古参の精霊だな」

層々たる顔触れに、ユフィンリーは絶句してしまった。

「ま、みんな俺には勿体ない奴らだよ」

「そんなことを言うものではない。何度も言うが、お前はアルトヴァースと契約しているのだぞ。それだけで十分実力が分かる」

謙遜するブライトにコーティカルテが苦言を呈す。

ブライトは困ったというように酒を飲んでいたのだが……。

「そうよ～ぶらいろは～この～わたひと～け～やく～したんら～か～ら～」

酒に酔ったヴィオリニスタが後ろからブライトに抱きついた。

「ヴィーラ!? お前、酒飲んだな!!」

「らって～おいし～んだも～ん」

ヴィオリニスタは顔を真っ赤にしてケラケラ笑っていた。

「ヴィーラさん、どうしちゃったんですか」

ヴィオリニスタのあまりの変貌っぷりに、ペルセルテは目をパチクリとさせた。

「ヴィーラの奴、酒が全く飲めないくせに、少し目を離すとすぐ飲もうとするんだ。で、すぐにこうなる」

ヴィオリニスタはやけに嬉しそうにブライトの腕に抱きつく、そこに頼ずりまでし始めた。今までのお姉さんのような雰囲気は一切消え、ブライトに甘えるただの女の子のようになっていた。

「愛されてるわねー」

ニヤニヤ顔でブライトをからかうユフィンリー。しかしブライトは全くうろたえずヴィオリニスタの頭を撫でていた。撫でられているヴィオリニスタもまるで猫のようにゴロゴロしながら気持ちよさそうにしていた。

「まあ、かれこれ長い付き合いだからな……」

優しい瞳でヴィオリニスタの頭を撫で続けるブライト。

ヴィオリニスタはよっぽど気持ちよかったのか、スースーと寝息をたててしまった。

「あらら、寝ちゃったわね」

「ちよつとすれば起きるからこのままで大丈夫だよ」

このままというのは、ヴィオリニスタをこのまま腕に抱きつかせたままにしておく、ということ。かと言って照れる様子もなく、ブライトは平然と空いている方の手で、ヴィオリニスタを起こさないようにして酒を飲んでいた。それをどこか羨ましそうに見つめるコーティカルテ。

「コーティ、どうかした」

話しかけられたコーティカルテはフォロンのことをじーっと見る。

「な、なに？」

「少しはあいつを見習え」

「いたっ!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9130n/>

Giocato La Divina Commedia Doc Ju Mente 奏でよ、神曲を。謳え、汝の心を

2010年11月12日20時37分発行